

【モスクワ・アラカルト69】

## 4年8か月ぶりのモスクワは灰色

日向寺 康雄

2月末から2週間弱、モスクワに行ってきた。夏季休暇で一時帰国中、父が倒れ介護のためそのまま残ると決めてから4年余、昨年父を見送り大学も春休みに入り一段落したのを見ての待ちに待った「里帰り」だった。エアロフロート機がシェレメチェヴォに近づき、徐々に高度を下げ厚い雲を抜けて、ふいに眼下に冬枯れの白樺林と雪解けの始まった灰色の大地が見えた時には、目頭が熱くなった。

この小旅行は、本来休息の旅となるはずだった。仕事をしながら介護する私をずっと応援し続けてくれたモスクワの「子供達」や同僚、猫達をハグし感謝を伝え、2年前に友人と買ったアパートをこの目で見て、未来について語り合う楽しいものになるはずだった。しかし出発直前に始まったウクライナへの「特別軍事作戦」が、すべてを変えた。ソ連末期から国営メディアで働いていた私は「ワルシャワ条約機構が解体され東西冷戦が終われば、NATOも当然その役割を終え、今度は欧州からユーラシアを含めた新しい安全保障の枠組みが構築される」というゴルバチョフの考えを当時連日翻訳し、その実現を信じていた一人だ。だが現実はそのようならなかった。

NATOはロシアを仮想敵として東方拡大を続けた。「ゴルバチョフは西側に騙されソ連邦を消滅させた、東スラブの兄弟的価値観破壊の目論見を許せば今度はロシア連邦が崩壊してしまう」というプーチンの危機感を受け入れるロシア人は多いと思う。ロシア社会では、ソ連崩壊は「よきこと」をもたらさず、「民主化」はギャング資本主義到来につながり、かつてあった最低限の物質的豊かさや精神的余裕さえも享受できない人達が増え、治安も著し

く悪化したと捉える人が少なくない。そこに現れ、生活者の切なる願いに応えたのが他ならぬプーチンだった。ただ今回の行動は、最良の選択ではなかった。とはいえ今後ロシアの歴史教科書において、彼は「英雄」と評価されるかもしれない。

モスクワの街は、以前と変わらぬ温かさと気さくさで私を迎えてくれた。表面上目立った混乱や緊張もないかわりに、いつもならこの時期、街中に溢れる冬を送り春を迎える明るい喜びやウキウキ感、国際婦人デー前の華やかさはなかった。久しぶりに彼らと強くハグしあうと、よく分かる。言葉にできない戸惑いや不安、笑顔の裏の深い悲しみがドッと私の身体に流れ込むのだ。皆、親戚や友人がウクライナにいる。知り合いが兵士として戦っている場合もある。「戦争反対」だが、当事者にとって物事そう簡単に白黒つけられるものではない。すべて陰影のある灰色なのだ。

「がんばれ」と言っても何を頑張ればよいのか。私は無言で彼らをギュッとハグし返すことしかできなかった。命を賭して闘う以上、双方に自分達の「正義」がある。情報戦にフェイクはつきものだ。一方の主張だけを取り上げ人々の感情を煽り、そのみが正しいとする世論はひどく危ない。私は今回の悲劇について、双方は欧州近隣諸国やベラルーシの協力を得ながら、東スラブ人の叡智を信じ祈り、解決の道を平和的に直接じっくり模索すべきだと思っている。

(元モスクワ放送チーフアナ、現中大及び早大非常勤講師)

.....  
\*前回、68の記事の冒頭で「今年2月20日は・・・」とあるのは、「今年、2月10日は・・・」の誤りです。お詫びして訂正いたします。申し訳ありませんでした。(編集部)